2025年6月8日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

「風」があるところ、自由あり

［フィリピの信徒への手紙2章1～11節］

そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

［使徒言行録2章1～4節］

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。

[1] 「聖霊」―一方的な贈り物

　今日は、「聖霊降臨日」でもあります。イエス様がおよみがえりになって50日目（「ペンテコステ」という名前の由来）、つまりイースターから7週間経ったこの日が「聖霊降臨日」ということです。そこで今日は、先週から読み始めている「フィリピの信徒への手紙」にも触れますけれども、聖霊降臨の出来事が記されている「使徒言行録」の箇所も開いて、私たち自身も今日、新しく聖霊に息吹に触れさせて頂きたいと願います。

　お読み頂いた使徒言行録2章の出来事が起こるには、前提があります。それは、ルカによる福音書のほぼ最後の部分です。復活されたイエス様は弟子たちにお姿を現され、天にお昇りになる前にこういう言葉を残されたんです。―「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都に留まっていなさい」（ルカ24:49）と。その後イエス様のお姿は、父なる神様のもとに挙げられ、肉眼からは消えます。使徒言行録1：6以下で、もう一度詳しく、主イエスが天に上げられた記事を記していますが、その後は、もうイエス様自身は出てきません。しかし、イエス様の働きは弟子たちの中に、「聖霊」を通して形を変えて続けられていくことになります。使徒1:13を見ますと、彼らは都エルサレムで、ある家の中で集まっていたのです。こう書いてあります。「彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心をを合わせて熱心に祈っていた」。

　そして、使徒2:1～2です。遂に「約束されたもの」が上から彼らに与えられたのです。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」　誰も予想もしていなかったような出来事です。「激しい風が吹いてくるような音が家中に響いた」というのですから、驚いたと思います。けれどそれは、この地上に吹き荒れる台風のような恐ろしい風ではなく、「天から聞こえた」とあります。これは「天の風」「神からの風」だったということですよね。さらにこうあります。3節。「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」これも不思議なことです。私はこれはある意味、世界伝道が始まって行くため、その時代、神様が特別に彼らに与えて下さった出来事だと思います。彼らが何か特別に霊的に優れていたからそうなったということではなく、福音と同じで、神様からの一方的なギフトだと思います。何故なら、彼らは皆、弱い者たちでした。十字架の許から逃走し、復活のイエス様に見出して頂くまで、部屋の中に鍵をかけて閉じ籠っていた情けないような者たちです。しかし、神様、イエス様の方が、彼らを見捨てなかった。弱い彼らが唯一やったことといえば、復活のイエス様の言葉を受け止め、バラバラにならず集会をし、祈っていた、ということでしょう。そこに、上から「聖霊」が注がれたのですね。

さて、その「（聖）霊」のことを、聖書は「プネウマ」と言って、それは、「風」とか「息」とも訳し得る言葉で表現しています。それは私たちの理解を助けてくれる言葉だな、と思います。

　私は、若い頃よく山登りをしていました。夏山ではありますが、結構北アルプス、南アルプスに泊りがけで登ったりしました。何で山登りが好きになったのかと言いますと、大きな理由の一つは、汗をかきながら一歩一歩登る中で、山から吹いてくる風が顔に当たる心地よさと言っても良いかなと思います。「生きていて良かった！」とさえ思います。ほんとに気持ちが良い。皆さん、もしこの世界に風がなかったら…と考えてみて下さい。ちょっと気持ち悪いですよ。上から心地良い風が吹いてくる。それだけで、人間の心は癒されたり、生き返ったような気持ちになるのは、それ自体、神様からの愛のような気がします。

　そして、この風は、一人一人それぞれに吹いてくるのだということを聖書は語っていると思います。使徒言行録2:3をもう一度見ると、「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」と書いてあります。聖霊は、私たちを十把一絡げに捕らえようとはなさらないのですね。聖霊は風のようでもありますが、炎のようなものでもあり、「分かれ分かれに」、「一人一人の上に」と記しているその言葉は見過ごせないと思います。これが神様のなさり方なんだ、と思います。一人一人顔が違うように、聖霊のお働きも、一人一人に異なる形で、一人一人を生かす形で注がれるということだと思います。聖霊のわざは最初から「多様性」を持っている、と言っても良いでしょうね。「全体主義」のようにまとめるのが聖霊ではないのです。

[2] 「生きよ」との声

　今、NHKの朝の連続テレビ小説で「あんぱん」をやっていますが、この間の金曜日の放送は、とても心にズシンと来ましたね。やなせたかしさんという「アンパンマン」で有名な漫画画家とその妻のぶさんが主人公なんですが、ちょうど今、戦時中の緊迫した時期の話で、たかしにもいわゆる赤紙が来て、戦地に送り出されるため出征していく場面が描かれていました。たかしは、絵ばかり描いていて、戦争とか軍隊とかには反発を感じている若者なんです。しかし、出征命令が来て、皆が「万歳万歳」と言って送り出すシーンが描かれていました。時は、反戦的なことは言えない空気がある。弱音を吐くことは許されない空気がある。「ご無事で」とさえ言えない。その今正に皆に送り出されていく直前に、たかしの母親が現れて（その母親は、ある意味勝手な母親で、いつの間にか男の人を作ってたかしのもとを去っていったこともある人なのですが）皆が居る所で、「たかし！いいこと？生きて帰っていらっしゃい！逃げ回ってもいい、周りから卑怯と言われてもいい、生きて帰ってきなさい！」と叫ぶのです。周りは騒然とします。たかしは驚きます。そして、もう一人、たかしの幼なじみののぶも、彼女もいつしか学校の教師として「愛国の鑑」とさえ呼ばれる存在になっていたのですが、そのたかしの出征間際に駆け付け、そのたかしの母親の言葉も聞くのです。そして、これまで彼女が出すことが出来なかった心からの言葉をたかしに叫ぶのです。「たかし！必ず戻ってき！お母さんのために生きて戻ってき！死んだらしょうちせんき！」という場面がありました。…私は、それを見ていて、ああ、このお母さんも、のぶさんも、本当の心の思いを言えて良かったな、本音を言えて良かったなと思いました。これはこの時非国民の言葉になってしまうのです。事実、この二人は憲兵に連行されそうになったのですが、何とかたかしの機転で「立派にご奉公して参ります」と、その場を収めるのですが…。「生きて欲しい！」これが言えないというのは、私たちがマインドコントロールにかかっているということです。しかし、「聖霊」は、私たちを‟生かす”霊です。人を較べたり、人を排除したりしない霊です。

[3] イエス様のもとから吹いてくる「風」

　フィリピの信徒への手紙については、あまり触れられませんでしたけれど、ここでパウロがどうしても言いたかったことは、キリストはあなたたちを本当に生かすために、低く低く降ってきて下さったお方だ、ということです。フィリピの教会も、ある意味人間の集まりで、色々なことがあったようです。それはいつも時代でも変わらないと思います。私たちは弱いので、強く思えるもの、長いものに巻かれたりすることがあります。そして「本音」が言えなくなる。不自由な心で生きなければいけなくなる…。しかし、そんな不自由を吹き払ってくれるのが、聖霊ではないでしょうか。私たちを生かす聖霊、それは、イエス様のもとから吹いてくる風です。どんな風でしょうか？―「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」　このイエス様ご自身が、私たちの人生の中に与えられたのです。神様は「上から」私たちを支配なさいません。イエス様は神の身分を投げ捨ててまで、私たちを「下から」支え、私たちを決して捨てないお方です！…実は、私たちは、自分の罪の中に死んでいた者です。しかし、十字架の贖いと、復活の主の息吹によって、新たに神様からの命を注がれた者なのです！私たち、既に神様のものとされたのですから、もう自分に拘る心から自由にされるんですね。私たちの力ではなく、聖霊を頂くことによって。聖霊に導かれる人生は「ああ、生きていて良かった！」と実感できる人生だと思います。だからこそ、お互いのことも大切にして歩むことが出来るようにされるのではないでしょうか。フィリピ2:3をお読みしてお祈り致します。「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。

神様、私たちを真に生かす聖霊を与えられていることを感謝致します。どうぞ、あなたの風に吹かれて、本当の自由の中を、人と共に生きて行く自由と喜びの中にこれからも導いて下さい。感謝して、主イエス・キリストに御名によって祈ります。アーメン。